

## 西行自歌合注釈(三)

武田元治

前稿に続いて、『御裳濯河歌合』の二十番以下、三十六番までをとり上げる。

### 二十番 左

三九 長月の月のひかりの影深けてすそののほらにをしか鳴くなり

右勝

四〇 月みばと契りおきてし古郷の人もやこよ袖ぬらすらん

すそのの原といへる、心ふかくすがたさびたり。但、人もやこよひといへる、ことばかざらずといへども、哀ことにふかし。右猶まさるべし。

### 【通釈】

二十番 左

三九(晩秋) 九月の月の光がふけた色を帯びて、すそ野の原に牡鹿が鳴いているようだ。

右勝

四〇 月を見たら互いに思い出そうと約束した古里の人も、今夜(わたしと同じように月を見て)袖を涙で濡らしているであろうか。

「すそ野の原」と詠んでいる(左の)歌は、思い入れが深く、姿にさびた趣がある。しかし、「人もやこよひ」と詠んでいる(右の)歌は、言葉は飾ったところがないけれども、とりわけ哀れの

深いものがある。右の歌がやはり勝ると言うべきであろう。

【注】○影深けて 光がふけた感じになって。「深けて」は、夜が更けた意を示すとともに、「長月」との関連から見ると秋の深まった意も含まれるかと思われる。「影くらく」(彰考館蔵枅形本)、「影ふかく」(昌平坂学問所本)等の異文もある。○すがたさびたり この歌合では次の二十一番の判詞にも、左右の歌に対して「すがたさび」と俊成は評している。「すがた」(姿)は、「こころ」(心)を「ことば」(詞)を通じて表現した一首の様態。「さび」を俊成が歌合判詞に用いた用例は十三例ほどが残されているが、いずれも動詞の連用形で、後の蕉門の俳論の用例のように名詞として理念化されてはいない。しかし俊成は歌に価値を認めた場合の評語として用いている。その内容を岡崎義恵氏は「歌詞がやや古風で落着きがあり、静かな深い感じを与えるやうな場合に言っているやうである」(『わび』と『さび』——『美の伝統』所収)とされた。

【考察】二十番は左右ともに月の歌である。

二首のうち左の歌は、鹿の歌とも見られるが、この歌は『聞書集』(八九)では「あきの月をよみけるに」として収められる四首中の一首である。なお『聞書集』では一首は初句が「あきのよの」となっており、これを『御裳濯河歌合』で「長月の」とするのは、西行が後に改めたものであろう。「長月」とすると、月も晩秋の、さびた月のイ

メージになる。右の歌は、『西行上人集』（一八六）で「月」と題する歌群中の一首である。『新古今集』（九三八）では羈旅の部に収められ、「だいしらず」となっている。

左の歌は、陰曆九月の夜更けの月光の下ですそ野に牡鹿が鳴く風景を描く。静かな、もの寂しい感じをもたらし情景である。

右の歌は、旅先での思いを、「月を見たら（互いに思い出そう）と約束した古里の人も、（自分と同じように）今夜涙しているであろうか」と歌う。簡素な歌い方であるが、含むところの多い表現で、「古郷の人も」と言うことで自分の様子を併せて示し、感傷の心を余さず伝えている。

俊成の判詞は、左の歌に対して「心ふかくすがたさびたり」とその特長を認める一方、右の歌は言葉は飾ったところがないが「哀ことにかし」と評し、右の勝と判定している。これは右の歌の、人の世の根本的な哀れさに触れた感傷の心を的確に表現した点を、より高く評価したのであろう。

ただ評語の面では、左の歌に関して「心ふかく姿さびたり」という評語を用いている点が注目されると思う。特に「さび」と評するのは、後に心敬の「ひえさび」（『ささめこと』）などを経て蕉門俳論の「さび」に展開していくと思われる点で注目されるのである。この場合、左歌の「すそ野の原といへる」点を「姿さびたり」と評しているが、「姿」と言う以上、「すそ野の原」の語句だけをとり上げたのではなくて、この語句で左歌全体を示したのであろう。そして左歌が静かな寂しい情景を、古風とも言える地味な言葉運びで表現しているような点を、「姿さびたり」と評したのではなからうか。

【備考】二十番右歌は『新古今集』（九三八）に収められている。

## 二十一番 左持

四一 蟋蟀よさむに秋のなるままによわるかこ急の遠さかり行く

右

四二 松にはふまさのはかづら散りにけりと山の秋は風すさむらん

左右共にすがたさび詞をかしく聞え侍り。右のまさのはかづら、すこしいかにぞきこゆれども、外山の秋はなどいへる末句（末の句に）に侍れば、猶持と申すべくや。

【通釈】

二十一番 左持

四一 こおろぎは、秋が夜寒になるにつれて、弱るのか、声が次第に遠く、かすかになつていく。

右

四二 松の木にまつわる、まさのはかづらは、もう散ってしまった。里近い山の秋は、風が吹きつづけているのであろう。

左右の歌は、共に姿がさびて、言葉遣いが興味があると思われる。ただ右の歌で「まさのは」と言っているのは、少々問題があるかという気がするけれども、「外山の秋は」などと詠んでいる下の句は優美ですから、やはり持と判定すべきかと考えます。

【注】○蟋蟀 きりぎりす。今のコロギ。○よさむ 夜寒 晩秋のころ夜半に寒さが感じられること、またその時候を言う。○まさのは かづら散りにけり 『西行上人集』（李花亭文庫本、六一九）には「まささきのかづらちりぬなり」とあるが、「まさのはかづら」という語は俊成が判詞に問題視してとり上げているので、この歌合ではこの形であったはずである。また『新古今集』（五三八）でも「まさのはかづらちりにけり」の形が多いから、「まささきのかづら」の形は、一般的なその名称に後人が改めたのではなからうか。しかし「まさのはかづら」は「まささきのかづら」と別物ではあるまい。「まささきのかづら」を詠んだ「深山にはあられふるらし外山なるまささきのかづら色づきにけり」（『古今集』一〇七七）は、神楽歌として有名で、右歌の本歌と見られる。「まささきのかづら」は常緑のつる性の植物であるが初夏と初冬に赤く色づく。○と山 外山。人里に近い山。深山、奥山などに対して言われる。○すがたさび 二十番の「注」「考察」で触れた。

なお後記の「参考」参照。

【考察】二十一番は、左が「きりぎりす」の歌、右が「まさのはかづら」の歌で、いずれも晩秋の風物として詠まれているようである。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』(二七〇)に「虫」の題で見える。『新古今集』(四七二)では「題しらず」になっている。右の歌は、『西行上人集』(六一九)に二・三句が「まさきのかづらちりぬなり」の形で出ており(これは「注」に記したように後人が改めた形かと推測される)、『新古今集』(五三八)とともに「題しらず」になっている。

左の歌は、秋の夜寒になるにつれて、こおろぎの声がかすかになるのを、実感としてとらえたところによって詠まれた作であろう。参考歌として、すでに指摘されているとおり次の歌が考えられる。

秋ふかく成行くままにむしのねのきけば夜毎によわるなるかな

〔堀河百首〕八二九、隆源「虫」

この隆源の歌の「むしのねの……よわるなるかな」に比べると、西行の歌の「こゑの遠ざかり行く」は、より感覚的、具象的な表現であろう。

右の歌は、「まさのはかづら」の散った姿を見たことから、「と山の秋は風すさむらん」と思いやっっており、これも実感に基づいて詠まれたことを思わせるようである。ただし本歌として次の歌が挙げられる。

深山にはあられふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり

〔古今集〕一〇七七、神あそびのうた

それにしても、この右歌で疑問が残るのは、作者がどの位置で「まさきのはかづら」の散ったのを見て「と山の秋は風すさむらん」と思いやっっているのか、明らかでない点である。これについて古来二説があり、(1)深山から外山を思いやったと見る説(『兼載雑談』等)と、(2)里から外山を思いやったと見る説(『新古今増抄』等)がある。またそのいずれでもなく、(3)「自身は里に居て、たまたまその外山へ行っ

た」のであり、外山で葉の散ったのを見て「外山の秋は、風が強く吹くのであろう」と思ったと見る説(引用は窪田空穂氏『新古今和歌集評釈』)がある。前記「通釈」は、(3)によって記した。

俊成の判詞は、「左右共にすがたさび、詞をかしく」と評しており、二十番左歌に対する場合と同じ「すがたさび」の評語を用いている。二十番左歌と併せてこの左右の歌を見ると、三首に共通するのは、晩秋のもの寂しい情景を、古風とも言える簡素な言葉遣いで詠んでいることであろう。こういう艶とは程遠い、いわば渋い歌の姿を、俊成は「すがたさび」と評しているのではないかと思う。

なお、判詞では右の歌の「まさのは(かづら)」の語を問題にしているが、これは「まさきのかづら」が古来歌に用いられる言葉なので、伝統的な言葉遣いを重んじる俊成の立場から注意したのであろう。

【参考】〇「さび」について

歌合判詞に見える評語「さび」の用例の中では、俊成のものが最も古く、十三ほどの用例(内一例は本によってこの語を欠く)が残されている。この俊成の判詞の「さび」は、すべて動詞の連用形で、蕉門俳論の「さび」のように名詞として理念化されていないが、歌に独自の価値を認めた場合の評語として用いられている。

俊成の評語「さび」の対象とするところに注目すると、この『御裳濯河歌合』二十番と二十一番の判詞に見られるように一首の「姿」に対して言った場合が多く、全用例のほぼ半数に及んでいる。歌の一部の語句を挙げて「さび」を言った場合も、歌一首の中でのその語句を意識することが多いようである。

そして「さび」と評せられた歌を見ると、やはりこの歌合二十番左歌や二十一番の左右の歌のような特徴をもつのが一般のようである。すなわち大部分は叙景的な作であるが、寂しさ、心細さ、幽かさなどの印象を与える情景を、飾りけがなく新奇に走らぬ古風とも言える言葉で表現した歌について、俊成は「さび」の評語を用いていると見られる。

俊成が「さび」と評した歌の中で、叙景的な作でない少数の歌としては、次のような述懐や恋の歌がある。

ねざめしてもぞかなしきむかしみし人はこの世にあるぞすくなき  
〔広田社歌合〕述懐十三番右、寂念

たづねつる道にこよひはふけにけりすぎの木ずゑにありあけの月  
〔六百番歌合〕恋一、二十九番尋恋、左、良経

俊成は前者に対して「姿さびて、心ほそく」、後者に対して「ありあけの月の殊にさびて」などと評しているが、この二首にもやはり前記のような特徴が見られると思う。

ところで、俊成は「さび」と評した歌にどの程度の価値を認めていたであろうか。この点を考えるための資料として勝負の判定状況を見ると、「左右共に姿さび」と評した用例を除外した十二例では、勝五、持四、負三となっている。ただし負三については、内二例は別表現上の欠点が指摘され、それが負とされる根拠と見られるので、「さび」に関する価値意識を考える場合、そのまま参考資料とすることはできない。概して俊成は「さび」の特長にかなりの価値を認めていたように思われる。

【備考】二十一番号左右の歌は、ともに『新古今集』（四七二、五三八）に収められている。

#### 二十二番 左勝

四三霜さゆる庭のこのはをふみ分けて月は見るやととふ人もがな  
右

四四山川にひとりはなれてすむ（せむ）鷺の心しらるる波のうへかな  
右歌も、いみじくえんには聞ゆれど、左歌、猶心すがた（こと）殊よし。  
勝と申すべし。

#### 【通釈】

#### 二十二番 左勝

四三霜が（月光を受けて）ひときわ白く冷たく置く庭の落葉を踏み分

けて、月は見ているかと、訪ねてくれる人がいてほしいものだ。

右

四四山の川に一羽だけ孤独に住むおしどりの（寂しい）心が伝わってくる、その波の上の姿よ。

右の歌も、大層艶なものには思われるけれど、左の歌は、やはり心や姿が特に優れている。勝と判定しようと思います。

【注】○鷺をし。おしどり。雌雄が番いでいることが多く、夫婦の仲のよいたとえにもされる。夏に山奥に巣を作って産卵し、和歌では冬の景物として詠まれた。

【考察】二十二番は、左が冬の月の歌、右が冬の鳥としての「鷺」の歌である。

二首のうち左の歌は、『山家集』（五二二）および『西行上人集』（二八三）に「閑夜冬月」の題で見える。『千載集』（一〇〇九）には「寒夜月といへる心をよみ侍りける」として出ている。右の歌は、これ以前の歌集に見えない。後の『雲葉和歌集』（八〇七）には二句「ひとりながれて」の形で「題不知」として収められている。

左の歌は、落葉の積もる庭に霜の白い閑居で、自分と共に月を眺める友を求める気持だが、素直に詠まれている。『山家集』でこの歌の少し前に見える、

さびしさにたへたる人のまたもあれないほりならべん冬の山ざと  
（五二三）

とも共通する心境の歌であろう。

右の歌は、普通なら番いでいるべきおしどりの、一羽だけの孤独な姿をとり上げて、その「心しらるる」と詠む。「心しらるる」と言う以上、当然自分が孤独の寂しさを体験していて、その立場から一羽だけのおしどりに共感しているのであろう。この孤独の寂しさから人を恋しく思う心ががわられる点は、左の歌と同様と言える。ただし、番いでいないおしどりに関してこのように詠むのは先例があり、『堀河百首』の恋の歌に、

ひとりぬる我にてしりぬ池水につがはぬ鴛のおもふ心を（二二三  
三、藤原公実）

の一首がすで見られる。これと比べると西行の右歌は山川の波の上  
の「羽の鴛の姿をより具象的に印象づける特長は認められるにして  
も、発想の基本は新しいとは言にくい。

俊成の判詞は、右歌を「いみじく艶」と評価しながらも、左歌を  
「心姿殊よろし」と評して勝と判定している。左歌の閑居に冬の月を  
見ながら人恋しくも思う気持が素直に詠まれた点を、より高く評価し  
たのであろう。

【備考】二十二番左歌は『千載集』（一〇〇九）に収められている。

### 二十三番 左持

四五 大原はひらのたかねのちかければ雪ふる程を思ひこそやれ

右

四六 枯野うづむ雪に心をしかすればあたりの原に雉なくなり

左、ただ詞にして心あはれふかし。右は、心こもりてすがたたけ  
あり。なずらへて持とす。

### 【通釈】

### 二十三番 左持

四五（あなたの住む）大原は、比良の高嶺が近いので、雪の降る古里の様子  
の様子を（さぞ大変だろうと）思いやるのです。

右

四六 枯野をうずめて積もる雪に、心を任せて（心を雪と一つにして）  
いと、安達の原の静けさを破って、雉の鳴く声があった。

左の歌は、飾りけのない言葉を用いているが、その心はしみじみ  
と深い感動を与える。右の歌は、深い心がこもっており、その姿  
は高い格調を感じさせる。（左右の歌を）同列に見なして持と判  
定する。

【注】○大原 今の京都市左京区の大原の里。都の生活を捨てて隠れ

住む山里として有名。○ひらのたかね 比良の高嶺。今の滋賀県滋賀  
郡の北部、比叡山の北に連なる連山。○雪ふる程を 『平安朝歌合大  
成』の本文は「雪ふる里を」で、その場合は「雪降る」に「古里」を  
掛けた表現と見られる。なお、『山家集』では「雪ふるほどを」、『西  
行上人集』には「雪ふる戸ぼそ」。○枯野うづむ雪に心をしかすれば

「枯野」は、冬枯れの野。「しかすれば」は、そのようにすると、す  
なわち、一面に積もる雪に心を合致させると、の意味であろうかと思  
う。この部分は群書類従本等には「しらすれば」とあるが、雪に心を  
占めさせると、の意味とすると、ほぼ同様の内容を表すと考えられ  
る。後の『夫木抄』（九八六九）に「まかすれば」とあるのは、明ら  
かに、雪に心を任せていると、の意味と見られる。○あたりの原 安  
達の原。今の福島県安達郡の安達太良山の東の原野。陸奥の歌枕。た  
だし群書類従本等では「あたりの原」。○雉なくなり「雉」は、きぎ  
す（きじの古名）。この鳥は題詠では一般に春の鳥とされるので、伊  
藤嘉夫氏校注『山家集』ではこれによって「まだ冬だと思ってるう  
ちに、あたりの原ではもう雉が鳴くよ」と解され、渡部保氏『西行山  
家集全注解』にも同様の解釈が見られる。これに対して窪田章一郎氏  
『西行の研究』では「西行自身は冬の歌として扱っているのは、枯野  
の雪も、雉も冬の実景であったからである」と、春の歌とする見方  
を否定し、「雪と心とを一つにしていると、あたりの原に、雉子がい  
わかに鳴く、というのである」とされた。「きぎす」を詠んだ歌は、  
勅撰集でも春の部に入れられることが多いが、すべてそうであるわけ  
ではなく、『後拾遺集』冬の部には「うちらはらふ雪もやまなん御狩野  
のきぎすのあともたづぬばかりに」（三九四、能因）などの歌が見え  
る。「西行の研究」の説に従いたい。○ただ詞 飾りけのない言葉。

【考察】二十三番は左右ともに雪の歌である。

二首のうち左の歌は、『山家集』雑の部（一一五五）に、「寂然入  
道、大原にすみけるにつかはしける」の詞書で出ている。『新勅撰集』  
冬の部（四一五）には、「高野に侍りけるころ、寂然法師大原にすみ

待りけるにつかはしける」の詞書で出ている。右の歌は、これ以前の歌集に見えない。晩年の作であろう。

左の歌は、前記の詞書が示すように、西行と親交のあった寂然（俗名藤原頼業）が大原に隠棲していたのに贈った歌である。大原を比良の高嶺との地理的關係でとらえた上で、その雪深い里に住む寂然を思いやる気持ちを、簡素な言葉で詠じた作と言えるであろう。ちなみに寂然の返歌も『山家集』に見える。

思へただ都にてだに袖さえしひらのたかねの雪のけしきを（一一五六）

二首を比較してみると、西行の贈歌の方が一息に詠み下して、強い迫力を感じさせるのではなからうか。

右の歌は、異文の箇所が多く、「注」に記したような解釈上の説の相違も見られるが、『西行の研究』に記された次のような見方が適切であろうと思う。

枯野の雪と心とを一体としている境地で、（中略）静中の動というべきもので、雉子の鳴く声に感動し、集中した心を対象としている。（中略）自歌合の初出歌であり、晩年の歌境と認めていいものであらう。

俊成の判詞は、左歌が簡素な表現で雪深い里に住む友を思う真心を詠じて感動を呼ぶ点、また右歌が雪の自然と一体化した深い心をこめて格調高く詠んでいる点を、それぞれ特長として挙げた上で、持と判定している。短いが要を得た批評であらう。

【備考】二十三番左歌は『新勅撰集』（四一五）に収められている。

## 二十四番 左

四七かずならぬ心のとかなしはててしらせこそは身をも恨みぬ

右脚

四八もらさでや心のうちをくまれました袖にせかるる涙なりせば

両者の恋ともに心ふかしといへども、右歌、猶よしありて聞ゆ。

まさるべくや（大成）  
勝つべくや

【通釈】

二十四番 左

四七とるにたりない身の、心の過ちにして（恋をあきらめて）しまつて、  
思いを知らせることをしないでわが身を恨もう（大成）  
まい、思いを伝えた上で（かなわなければ）わが身を恨もう。

右脚

四八（外に）漏らさずに、わが心の内（の思い）を知ってもらえたであらうか、——袖で抑えきれぬ涙であったとすれば。

二首の恋の歌は、ともに思い入れの深い作であるが、（比較すると）右の歌の方が、より趣があると思われる。（右の）勝とすべきかと思う。

【注】○かずならぬ ものの数でない。とるに足りない。○心のとかなしはてて 心の過ちにしてしまふまい。「なしはてて」は、『平安朝歌合大成』では「なしはてて」の形で挙げる。「なしはてて」だと、心の過ちにしてしまつて、の意味であるから、この後の第四句を「しらせこそは」（思いを知らせないで）と読み、別の歌意に解することになる（「通釈」参照）。なお、「なしはてて」に対して「なしはてて」の異文が見えるのは、『山家集』『西行上人集』等でも同様である。『新古今集』では多くの本が「なしはてて」である。○袖にせかるる涙 袖で抑えられる涙。なお一首で「漏らす」「汲む」「塞く」は縁語。

【考察】二十四番は左右ともに恋の歌である。この恋の歌を組み合わせる形は、以下二十八番まで続く。

二首のうち左の歌は、『山家集』（六五三）、『西行上人集』（三二八）のいずれも「恋」と題する歌群の中に置かれる。『新古今集』（一一〇〇）では「題しらず」であるが恋の部に見える。右の歌は、これ以前の歌集に見えない。

左の歌は、「注」に記したように、第三句の本文を「なしはてて」とするか「なしはてて」とするかの違いで、歌意が大きく変わる。

「なしはてじ」の形は『新古今集』の多くの本にも見られるもので、これによって一首を見ると、「自分の恋を心の過ちにしてあきらめてしままい、思いを打ち明けて、それで駄目ならば身の不運を恨もう」という大意であろう。すると、忍ぶ恋から一步踏み出そうとする積極的な意思が率直に詠まれている点で、特色のある作と見られる。

「なしはてて」の形でも、「なしはてで」と読めば歌意は「なしはてじ」の場合と大差がないことになる。しかし「なしはてて」と読めば、次の第四句を「しらせでこそは」と読まないで歌意が通じないであろう。そのように読むと、一首は「自分の恋を心の過ちにしてあきらめて、思いを打ち明けず、身の不運を恨もう」という大意になる。そこでこの場合は忍ぶ恋に徹する気持を詠んだ作ということになる。

右の歌は、事実に対する仮定の下に想像されることを言う語法による。また仮定した条件を下句に置き、その条件で想像されることを上句に置いて、いわゆる倒置の形をとる。「通釈」では仮定し倒置した形そのままに訳したが、仮定によらず倒置しない形で言えば、「袖で抑えきれないくらい流す涙のために、心の内の恋の思いをつい漏らしてしまった」という大意になるのではないか。

窪田章一郎氏『西行の研究』では、この右歌を次のように解釈しておられる。

洩らさずしては、心の底の思いを汲み知られることはなからう、このままに袖に塞ぎとめられている涙であるならば、思い知られることはないのだ

しかし、一首の文脈を普通にたどっていけば、やはり前記のように解する方が妥当ではなからうか。それで、忍ぶ恋がおのずと忍びきれなくなった心をこういう形で詠んだと見たい。

俊成の判詞は、左右ともに「心ふかし」としながらも、右歌の方が「よしありて聞ゆ」と評して勝とする。これによって考えると、俊成は左歌を第三句が「なしはてじ」（または「なしはてで」）の形で見

て、左歌が忍ぶ恋の範囲から踏み出そうとする意志を率直に詠んだ点を、情趣に欠けると見たのではなからうか。

【備考】二十四番左歌は『新古今集』（二一〇〇）に収められている。

#### 二十五番 左

四九あやめつつ人しるとてもいかがせむ忍びはつべき袂ならねば(大成)涙ならねば

右勝

五〇たのめぬに君くやとまつよひのまの深けゆかてただ明けなましか

ば

左、しのびはつべきといへる末の句はいとをかし。初始の五文字や如何にぞ聞ゆらん。右歌、心心ふかくやあらん(大成)猶ふかくやあらん。又右歌まさるとすべし。

#### 【通釈】

#### 二十五番 左

四九涙を怪しんで、人がわたしの恋を知ったとしても、仕方がない、  
——隠しきれぬような涙ではないのだから。

右勝

五〇来てくださる約束はないものの、もしや君が来るかと待つ、この宵の間は、更けてゆかず、このまま明けたらいいけれど。

左の歌で、「しのびはつべき」と詠んでいる下の句は大層興趣がある。ただ第一句（「あやめつつ」）は疑問のある表現かと思う。

右の歌が、やはり思い入れが深いと言えようか。また右の歌が勝ると判定しよう。

【注】〇あやめつつ 怪しんで。「あやむ」は、怪しむ意の動詞。ただし和歌に用いた例は少なく、八代集では次の一例が見える程度である。「おきてゆく涙のかかる草まくら露しげしとや人のあやめん(千載集)八二三、よみ人しらず」〇忍びはつべき涙 隠し通せるような涙。「涙」は『平安朝歌合大成』では「袂」、『山家集』『西行上人集』も同じであるが、袂の涙の意であろう。〇たのめぬに この「たの

む」は下二段活用の他動詞で、あてにさせる意。ここでは、恋の相手  
が来ようと約束しあてにさせているのではないのに、の意。○君くや  
君来や。君が来るか。○明けなましかば 夜が明けたとしたら（ど  
んなにいいだろう）。

【考察】二十五番も左右ともに恋の歌である。

二首のうち左の歌は、『山家集』（六六〇）、『西行上人集』（三二八）  
ともに「恋」と題する歌群の中に置かれている。右の歌は、『西行上  
人集』（六五四）に「恋歌中」と題する歌群の中に置かれている。

『新古今集』（二二〇五）では「恋歌とてよめる」として出ている。

左の歌は、第五句を「袂ならねば」とする本が多いが、「袂」は袂  
の涙を意味し、歌意はほとんど変わらないであろう。一首は、恋ゆえ  
におのずと流れる涙を人が怪しんで、忍ぶ恋の心を知ったとしても仕  
方がない、との気持を率直に歌っている。

右の歌は、恋人である男の訪れを待つ女性の立場で詠まれている。

「たのめぬに君くやとまつ」——恋人が来ると約束したのではないの  
に、もしかしたらと恋人の訪れを待つ、これは恋する心が深いからで  
あろう。そして、その訪れを待つ「よひのまの深けゆかただ明けな  
ましかば」——その宵が更けてゆかず、このまま明けたらいいと願  
う。そう願うのは、更けてゆくにつれて期待が裏切られるつらさを思  
うからであろう。恋をする女性の心理の機微に立ち入ってとらえたこ  
ろに特色の認められる作である。

俊成の判詞は、左歌については、その下句を「いとをかし」と評価  
する一方、初句の「あやめつつ」を問題視している。これは「注」で  
触れたように「あやむ」の語の和歌での用例が少なく、歌の用語とし  
て比較的伝統に乏しい点を、問題にしたのであろうと思う。

右歌については、「心深くやあらん」と評して勝と判定している。

右歌は女性の立場で詠んだ虚構の作であるが、恋をする者の微妙な心  
をとらえた思い入れの深さを高く評価したのであろう。

【備考】二十五番右歌は『新古今集』（二二〇五）に収められている。

## 二十六番 左持

五二世をうしと思ひけるにぞ成りぬべきよしのおくへ深く入りなば  
右

五二かかる身におほしたててけんたらちねのおやさへつらき恋もするか  
な

左の吉野のおくへいり、右の親さへつらき恋の心、ともにふかく  
は聞ゆ。大かたは、このいづこへといふ、への字は、これ又ふる  
くもちかくも人のよむ事にあれど、こひねがふべきにはあらざる  
なり。これも思ふ所を事の次（ついで）に申し侍るなり。但、歌の程持  
とす。

【通釈】

## 二十六番 左持

五二世に生きるのをいとい、身を隠したとされるに違いない、——こ  
れから吉野山の奥へ深く入ったら。（本当は、恋の悩みからのがれ  
るためのだが。）

右

五二こういう思い悩む身に育てあげた、親までが恨めしい、そんな気  
になるほど切ない恋を、わたしはする。

左の歌で「吉野のおくへ入り」と詠み、右の歌で「親さへつらき  
恋」と詠んだ心は、ともに思い入れが深いと思われる。ただ一般  
に、この（左歌に使われた）どこそこへと言う際の「へ」という  
文字は、これはやはり昔も今も人が歌に詠む言葉ではあるけれ  
ど、望ましい言葉ではないと思う。この点も自分個人として思う  
ところを事のついでに申しておくのです。もっとも、二首の歌の  
程度としては持と判定する。

【注】○よしの 吉野。今の奈良県吉野郡の一带を言うが、ここは主  
に吉野山が意識されていると思われる。平安時代には山岳信仰の地で  
あると共に隠棲の地とされたようである。『古今集』の「み吉野の山



のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ」(九五〇、よみ人しらず)、「世にふればうさこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ」(九五二、よみ人しらず)等は、世を住み憂く思つて吉野山に入る心が歌われている。○かかる身 このような身。具体的にどんな身と言ったかという点について、窪田章一郎氏は「恋の烈しさに身をもてあましている性情をいうのか、身分低い生まれをいうのかの二つである。どちらともとれるが、おそらく後者であろう」(『西行の研究』)とされた。これは「身分・階級・門地が結婚の条件としてやまましい貴族時代」という点を考慮した推測のようである。これに対して久保田淳氏は「おほしたつ」が『源氏物語』の用例によって「身分の枠内の成長をではなく、むしろ性格形成の過程をいう語ではなかったか」(『新古今歌人の研究』)と考え、「ひどく思い悩む性質を持った身の意」(『西行山家集入門』)とされた。○おほしたてけん 「おほしたつ」は、育てあげる意。『源氏物語』若紫の巻の用例を一つ引くと、「人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へおほしたてて見ばや、と思す」とある。○たらちねの 「おや」にかかる枕詞であるが、この場合のように枕詞を歌の第三句に用いる例は比較的少ない。いわゆる「半臂の句」で、表現上一種の間を作る用法の句と見られる。○おやさへつらき 親までが恨めしい。この語句は『延喜御集』の「身のうきに思ひあまりのはてははおやさへつらき物にざりける」(三三二)の用例がある。この歌は『玉葉集』(一七八〇)では女御藤原慶子の作とする。

【考察】二十六番も左右ともに恋の歌である。

二首のうち左の歌は、これ以前の歌集に見えない。右の歌は、『山家集』(六七七)、『西行上人集』(三二五)のいずれにも「恋」と題する歌群の中に置かれている。

左の歌は、「自分が吉野山の奥へ深く入ったら、無常の世に生きるのをいと身を隠したと人に見られるに違いない」というのが歌の表に出た大意で、「実は恋の悩みからのがれるための入山なのだが」と

いった余意を伝えた作であろう。なお一首はこれ以前の歌集に見えず、したがって西行晩年の作と思われるので、西行の若き日の体験そのままを歌ったと見るのは問題があり、「文学としての創作歌」(『西行の研究』)と見るのがよいのであろう。

右の歌は、「このような恋に悩む身に育てあげた親までが恨めしくなる」との大意で、激しい恋の悩みに関する思いを強く訴えた作である。こういう激しさは、晩年の西行の歌には見いだしにくいようである。

俊成の判詞は、左右ともに思い入れの深い作と見た上で、左歌の「吉野の奥へ」の「へ」という助詞の使用を問題視する。この「へ」は元来名詞の「辺」から出て、移動性の動作の目標を示す助詞となつたと見られており、後にはその意味を広げていくが、平安時代の和歌での用例は少ない。これは格助詞「へ」の成立が新しく、口頭語的な言葉という意識があつたためかと言われる。俊成としては、和歌の用語の伝統を重んじる立場から、その使用を望ましくないと考えたのであろう。

#### 二十七番 左

五三人はこで風のけしきは深<sup>も大成</sup>けぬるに哀<sup>あはれ</sup>にかりの音<sup>ね</sup>信<sup>まこと</sup>れて行く

右勝

五四物思へどかからぬ人もあるものをあは<sup>くやし</sup>かりける<sup>大成</sup>身の契<sup>くわ</sup>かな  
左も心ありてをかしくは聞ゆ。右歌猶よろし。勝と申す<sup>まこと</sup>べし。

#### 【通釈】

#### 二十七番 左

五三待つ人は来ず、風の様子は夜更けを思わせる折から、心にしみる声で、雁<sup>か</sup>が訪れて鳴いていく……

右勝

五四恋の物思<sup>ものおも</sup>いをして、わたしが悩むようなことはない人もあるの  
に、……しみじみとわが身の宿縁<sup>現念なものに大成</sup>が思われる。

左の歌も、思い入れが深く興味があるとは思われる。しかし右の歌はやはり一層結構である。(右の)勝と判定しよう。

【注】○風のけしきは深けぬるに 本歌合の諸本を通じて「風のけしきも……」の形が多く、『新古今集』も同様である。『西行上人集』では「風のけしきの……」。「風のけしき」が「ふけ」るとは、風の様子が夜更けを思わせること。これは『源氏物語』(夕顔)に「夜中もすぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは」とあるのによれば、風の様子を夜更けには荒くなると見られているらしい。○音信れて おとづれて。ここでは訪れる意と声を立てる意とを兼ねると思われる。○かからぬ人 二十六番右歌に「かかる身」とあったのと表裏の関係になる言葉で、恋にひどく悩む自分に対して、自分のように悩むことのない人。○身の契 身のちぎり。わが身の前世からの約束事。自分の宿縁。

【考察】二十七番も左右ともに恋の歌である。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』(六五三)に「恋歌中に」と題する歌群の中に置かれる。『新古今集』(一一二〇〇)では「題しらず」とする。右の歌は、『山家集』(六七二)、『西行上人集』(三五二)ともに「恋」と題する歌群の中に置かれている。

左の歌は、恋人である男の訪れを待つ女性の立場で詠まれている。ただ恋の心は冒頭の「人はこで」に示されるだけで、あとは夜更けを告げる秋風や、空を飛び過ぎる雁のあわれな声が描かれる。しかしこれらの風物の代表する秋の自然は、その中にいる女の孤独な思いを印象づけるところがありそうである。もともとも見方によっては道具立てをそろえ過ぎたとも思われ、「是でもか是でもか」といった嫌いは免れない(石田吉貞氏『新古今和歌集全註解』)といった批評も否定できないかとも思う。

右の歌は、恋に悩む身を自覚しての感慨を詠んでいる。「物思へどかからぬ人もあるものを」という上句の「かからぬ人」は、「注」に触れたように、二十六番右歌、

かかる身におほしたてけんたらちねのおやさへつらき恋もするかな

の「かかる身」と表裏の関係になる言葉で、「かかる身」が恋にひどく悩む自分を言ったのに対して、「かからぬ人」は恋をしても自分の悩むようには悩むことのない人を指すのであろう。したがって、そういう人もあるのに、という上句の後には、自分がこんなに悩むのはなぜか、といった余意があり、それを受けて「あはれなりける身の契りかな」と、自分の宿縁を「あはれ」と思う下句が詠まれている。恋に悩む身を自覚した者の感慨をそのまま歌ったような感じを与える作である。

俊成の判詞は、左歌を「心ありてをかしくは聞ゆ」と評価しながらも、右歌を「猶よろし」と評して勝とする。勝とした理由は明確に記されていないが、左歌が前記のように趣向の面でやや道具立てをそろえ過ぎたとも見られるのに対して、右歌が真率な嘆声を響かせていると思われる点を、俊成はより高く評価したのではなからうか。左歌のように勅撰集に収められることはなかったが、右歌にはいかにも西行らしい率直な歌い方が見られると思う。

【備考】二十七番左歌は『新古今集』(一一二〇〇)に収められている。

#### 二十八番 左持

五五 なげけとて月やは物をおもはするかこちがほなる我が涙かな

右

五六 しらざりき雲のよそにみし月の影を袂にやどすべしとは

兩首共に心ふかくすがたをかし。姿儀也(大成)よき持とすべし。

#### 【通釈】

#### 二十八番 左持

五五 嘆けといって、月が物思いをさせるのか、そうではない(つれな  
い人のせいである)のに、月にかこつけがましく、恨むようにこぼ  
れる、わたしの涙よ。

右

五六思いもよらなかつた、——遠い空のあなたに見た月の光を、涙に濡れた袂たもとに宿すことになろうとは。(会いにくいお方に恋をして、嘆くことになろうとは。)

左右の二首共に思い入れが深く、歌の姿も興趣がある。(姿が優美である。大成)いずれもよい歌で持と判定しよう。

【注】○かこちがほなる かこつけるような様子。「……がほ」は西行の愛用語であるが、俊成は十一番左歌の「見せがほに」について判詞で問題にしており、一般に歌合の歌の場合は「……がほ」という表現を適当でないと考えていたらしい。(十一番の「考察」参照。)しかしこの二十八番判詞では別に触れていない。○雲のよそにみし月 遠い空のあなたに見た月の意であるが、ここでは「雲の」が宮中を暗示し、遠い存在としての高貴な女性の隠喩と見る説が多い。これに対して窪田章一郎氏『西行の研究』では、『山家集』でこの歌を含む歌群全体を視野に入れる立場から、「月に寄せる恋の一般的な表現と見て、特殊なものと考えないほうが、この歌群全体とのふりあいからみて妥当と考えられる」として、「ほのかに見た人」という程度に解される。○すがたをかし 「姿優也」とする本が多い。

【考察】二十八番も左右ともに恋の歌であるが、月と涙にかかわる点も共通する。

二首いずれも『山家集』(六二八、六一七)にあり、恋の部の「月」と題する歌群の中に見える。『西行上人集』(三五三、三一五)にもあり、「恋」と題する歌群の中に見える。また『千載集』にも入っているが、左歌(九二九)は「月前恋といへる心をよめる」の詞書があり、右歌(八七五)は「題しらず」となっている。

左の歌は、自身を省みる態度に基づいて詠まれている。月は無心に照らしているのに、つれない人を恋する自分は月にかこつけて涙を流している、というのが大体的内容であろう。『山家集』でこの歌を含む歌群の中には、

こひしきをもよほす月のかげなればこぼれかかりてかこつ涙か  
(六三三)

の一首も見え、ここでは月は恋しさを誘うものとされ、だから月を見ると涙がこぼれると歌われる。それはそれで正直な感想であろうが、ここでは「なげけとて月やは物を思はず」と反語を用いて月が無心であることを強調した上で、「かこちがほなる我が涙かな」と自身を省みている。独自の内容で、歌の調べも自然な抑揚が感じられるようである。

右の歌も『山家集』の恋の部で左の歌と同じ「月」の歌群に収められているが、これは月に思慕する人の面影を重ねて、暗示する表現をとった点に特徴があるようである。そしてその人を恋して嘆く身になった思いがけなさを詠んでいるが、「知らざりき……とは」と倒置した形で思いがけなさを強調し、歌の調べの上でも起伏をつけている。俊成の判詞は、左右共に「心ふかく姿をかし」、あるいは「心ふかく姿優なり」と評し、「よき持とすべし」と判定している。俊成は『千載集』にも二首を共に選んでいるから、実際に「よき持」と考えていたのであろう。

【備考】二十八番左右の歌は、ともに『千載集』(九二九、八七五)に収められている。

二十九番 左持

五七かりくれし天の川原と聞くからにむかしの波の袖にかかれる

右

五八津の国の難波の春は夢なれやあしのかれはに風わたるなり

ともに幽玄の体なり。又持とす。

【通釈】

二十九番 左持

五七ここはあの、狩をして日が暮れた、(織姫に宿を借りよう)と葉平の歌に詠まれた天の川原、と聞くとともに、昔がしのばれて、川波

が袖にかかるように涙が袖をぬらした。

右

五八（能因が歌に詠んだ）撰津の国の難波の春の美しい景色は、夢であつたのか、今はただ一面の葦の枯葉に、風が吹きわたるばかりだ。

左右ともに幽玄の体の歌である。これも持とする。

【注】○かりくれし天の川原 狩りをして日が暮れたうんぬんの歌を在原業平が詠んだ、天の川の川原。この業平の歌は、『古今集』によると、「惟喬親王の供に、狩にまかりける時に、天の川といふ所の川のほとりにおりあて、酒などのみけるついでに、みこの言ひけらく、狩して天の川原にいたるといふ心をよみて、さかづきはさせ、と言ひければ、よめる」の詞書をもつ歌で、「狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の川原に我は来にけり」（四一八）。「天の川」は、今の大阪府枚方市を流れる川の名で、地名にもなっているが、それを空の「天の川」に見立て、「たなばたつめ」（織女星）に宿を借りよう、と歌つたもの。○聞くからに 聞くとすぐに。○むかしの波の袖にかかれる（業平が天の川の歌を詠んだ）昔のことが思われて涙が袖をぬらした、というのが主意で、それに川の波が袖にかかることを織りこんだ表現であろう。○津の国の難波の春 撰津の国の難波の春。能因が歌に詠んだものとして言う。その能因の歌は、『後拾遺集』によると、「正月ばかりに津の国に侍りけるころ、人のもとにいひつかはしける」の詞書をもつ歌で、「こころあらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを」（四三三）。○夢なれや 夢であつたのか。「なれや」は、助動詞「なり」の已然形に助詞「や」が付いた形で、この場合はここで切れ、疑問と詠嘆の意を示す。○幽玄の体 「幽玄」は、奥深さ、現実からの遠さを示す語であるが、人によりまた時によって内容に多少の相違も見られる。俊成はこの歌合では、十八番右歌に対する判詞にも「心幽玄に姿およびがたし」と評していた。その場合は歌の「心」について「幽玄」と評したのに対し、ここでは「幽玄の体

なり」と歌体（歌の姿）を「幽玄」と評しているが、「幽玄」の内容にも微妙な相違があるようである。この点については後の「考察」で触れてみたい。

【考察】二十九番の二首は、広く言えば雑の歌で、より限定すれば述懐の歌である。左は天の川、右は難波という水辺の地で、それぞれそこで詠まれた古歌の世界を思い、感慨にふけた作である。

二首のうち左の歌は、『山家集』板本（日本古典文学会刊『西行全集』所収、松屋本書入六家集本）雑の部（一一一三）に、初句「あくがれし」の形で出ており、その詞書は次のとおりである。

天王寺へまいりけるに、かた野など申渡り過て、みはるかされたる所の侍けるを問ければ、あまの川と申をききて、宿からんといひけんこと思ひ出されてよみける

右の歌は、『西行上人集』雑の部（四〇八）に題詞を伴わず出ている外、『新古今集』冬の部（六二五）に「題しらず」として収められている。

それぞれの歌に即して見ると、左の歌は、前記の『山家集』板本の詞書も示しているように、『古今集』の業平の次の歌を思い浮かべて詠まれている。

狩りくらししたなばたつめに宿からむ天の川原に我は来にけり（四一八）

この業平の歌は『伊勢物語』（八十二段）にも見えるが、天の川のあたりに来たのだから、「たなばたつめ」（七夕の織女）に一夜の宿を借りようと歌っている。その艶で風雅な古歌の世界を旧跡にしるので感動の涙を流したと西行は詠んでいるのであろう。

右の歌は、用いられた言葉から、『後拾遺集』の能因の次の歌を思い浮かべて詠んだ作と見られる。

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春の景色を（四三三）  
この能因の歌は「心あらむ人に見せばや朝露にぬれてはまさるなでしこの花」（『嘉言集』一一一三）の上二句をそのまま用いたこともあつ

て、「津の国の難波わたりの春のけしき」は具体的な描写を伴わないが、難波の春の海辺の美しい景色を言おうとしたものと思われる。その難波の春景色を、同じ土地ながら今は一面に冬枯れた葦原に寒風が吹きわたる中に立って、夢かと思ひやっているのであろう。

俊成の判詞は、左右の歌を「ともに幽玄の体なり」と評して、持と判定する。これは二首が、いずれも古歌に詠まれた美しい世界に心を向け、その現実から遠い美しい世界のほのかな面影を伝えた点を、特長と見て「幽玄」の評語を用いたものであろうと思う。

俊成がこの歌合の判詞に「幽玄」の評語を用いたのは、これ以外に、十八番右歌、

心なき身にも哀はしられけり鳴たつ沢の秋の夕ぐれ

に対して「心幽玄に」と評した用例がある。この二つの用例の「幽玄」の内容を、批評の対象とした歌に即して比べてみると、基本的には変わらないようであるが、微妙に異なる面もあるかと思われる。すなわち、それぞれの歌は現実を離れた深い世界への指向がうかがわれる点は共通すると思われるけれども、十八番右歌の場合には、幽寂な世界への指向が認められるのと比べると、二十九番の左右の歌の場合には、いわば美しい面影の世界への指向がうかがわれる点が相違しているのではなからうか。なお、前者を「幽玄」とするのは、俊成が師の基俊から学んだと思われるのに対して、後者を「幽玄」とするのは、俊成が新たな方面について用い始めたものと考えられる。このことについては、なお「参考」で触れる。

【参考】○「幽玄」について

「幽玄」の語が歌論に用いられた古い用例は、『古今集』真名序、『和歌体十種』等に見られるが、これを歌合の判詞に評語として用いたのは、まず藤原基俊で、用例二例を残しており、次に基俊の門に学んだ藤原俊成が評語として使い生かし、用例十四例を残し、後代にも大きな影響を及ぼしている。

俊成の用いた評語「幽玄」の内容を、批評の対象とした歌に即して

考えると、奥深さ、現実からの遠さを示すような基本的な点は各用例を通じて変わらないが、用例によって微妙に異なるところもあり、年代を追って見ていくと変遷した面をたどることもできるように思う。この事情を少し具体的にうかがってみよう。

まず俊成が「幽玄」の評語を用いた初期の歌二首を挙げる。

うちよする五百重の波のしらゆふは花ちるさとのとほめなりけり

(永万二年『中宮亮重家朝臣歌合』花二番左、隆季)

うちしぐれものさびしかるあしのやのこやのねざめに都こひしも

(嘉応二年『住吉社歌合』旅宿時雨二十五番左、実定)

俊成は、前の歌を「風体は幽玄、詞義非<sup>ニ</sup>凡俗<sup>ニ</sup>」と評し、後の歌を「ものさびしかるとおき、都こひしもなどいへるすがた、已に入<sup>ニ</sup>幽玄之境<sup>ニ</sup>」と評している。

前の歌は、「五百重の波」「しらゆふ」「花ちるさと」などの『万葉集』に見える古語を用い、花の散る里の遠景を、限りなく重なって寄せる波、白木綿のような波のイメージでとらえ、揺れ動く茫漠とした白の世界を表現している。ここには世俗から遠く離れた幽遠な世界へ向ける心がうかがわれるようで、そういう一首の特長を俊成は「幽玄」の語を用いて評したものであろうと思う。

後の歌は、「ものさびしかる」とか「都こひしも」とかの当時はあまり使われなくなっていた古風な言葉遣いで、時雨が降って寂しい旅先の仮の宿に目覚めて都の人を恋しく思う心を詠んでいる。ここには幽寂な世界へ向ける心がうかがわれるようで、そういう一首の特長を俊成は「幽玄」の語を用いて評しているのであろうと思う。

俊成のこのような「幽玄」の評語の用い方は、俊成の師の基俊の用法を継承したと思われる。基俊が「幽玄」の評語を用いた二首の歌は、次の歌である。

君が代はあまの岩戸をいづる日のいくめぐりてふ数もしられず

(天治元年『奈良花林院歌合』祝二番左、三郎公)

見渡せばもみぢにけらし露霜に誰がすむ宿のつま梨の木ぞ(長承

三年『中宮亮顯輔家歌合』紅葉二番左、宗能)

基俊は、前の歌に幽遠な世界へ向ける心を認め、後の歌に幽寂な世界へ向ける心を認め、それぞれ「幽玄」の評語を用いていると思う。こ  
ういう基俊の「幽玄」の用法を俊成は継承したものと見られる。そし  
て俊成のこのような「幽玄」の評語の使用は、その後しばらく続いて  
いるのであるが、やがて新しい面について「幽玄」の評語を用いるよ  
うになっている。

その俊成の新しい「幽玄」の用い方が最も明らかに見られるのは、  
俊成最晩年の、次の歌に対する判詞の用例であろう。

かぜふけば花の白雲ややきえてよなよなはるるみよしの月(千  
五百番歌合)二百七十一番左、後鳥羽院)

俊成は、この「夜な夜なはるるみ吉野の月」が「艶」で「おもかげ見  
るやうに」思われると言い、「幽玄におよびがたきさま」と評してい  
る。このような「艶」な「面影」の世界は、世俗の世界を超えた深い  
精神の領域に属するところから「幽玄」と評したものかと思う。す  
ると、ここには俊成による「幽玄」の内容の新しい展開が認められるこ  
とになる。

そしてこの「幽玄」の新しい用法は、『千五百番歌合』の判詞に初  
めて現れるものではなく、俊成の長年にわたる批評活動のうちに徐々  
に形成されてきた形跡をたどることができる。それで『御裳濯河歌  
合』の場合、十八番判詞の「幽玄」に幽寂な世界への意識が見られる  
一方、二十九番判詞の「幽玄」には美しい面影の世界への意識が認め  
られると思う。

以上、俊成の「幽玄」の内容の変遷の要点と思われるところを中心  
に、簡単に記してみた。詳細については小著『幽玄』——用例の注  
釈と考察』を参照してくださいと幸いである。

【備考】二十九番右歌は『新古今集』(六二五)に収められている。

三十番 左持

五九しげき野をいく一むらに分けなしてさらに昔を忍びかへさむ

右

六〇しをりせで猶山ふかくわけいらむうきこときかぬ所ありやと  
左、心ことにふかし。右、又をかし。猶持とすべし。

【通釈】

三十番 左持

五九今はただ草の茂る野を、心の中で(草の一むらずつ)幾つかの草  
むらに分けて、あらためて昔の様子を思い浮かべよう。

右

六〇(帰りの)目印に枝を折ったりしないで、もっと山深く分け入  
り、——いやなことを聞かずにすむ所があるかと探して。

左の歌は、とりわけ思い入れが深いと思う。右の歌はまた、興趣  
が深いと思う。(大感)やはりこの二首も持としよう。

【注】〇しげき野をいく一むらに分けなして 「しげき野」は、草の  
茂る野で、ここでは古里の屋敷の庭園のあったのが荒れて野となつた  
所として言う。そこを「いく一むらに分けなして」というのは、昔の  
庭園を思い浮かべて、草の一むらずつ幾つかの草むらに分けて見るこ  
とであろう。なお、この表現は、『古今集』の「君がうゑしむら  
すすき虫のねのしげき野べともなりにけるかな」(八五三、御春有助)  
と語句の一部が重なり、この歌を本歌として西行の歌が詠まれたと見  
られる。この歌は哀傷歌で、詞書に、「藤原の利基の朝臣の、右近中  
将にて住み侍りける曹司の、身まかりてのち、人も住まずなりにける  
を、秋の夜ふけて、ものよりまうで来けるついでに見入れければ、も  
とありし前裁も、いとしげく荒れたりけるを見て、はやくそこに侍り  
ければ、昔を思ひやりて、よみける」と記される。〇しをり 山道な  
どで木の枝を折り、後に通る際の目印とすること。〇右又をかし  
『平安朝歌合大成』の本文は「右、いとふ心又ふかし」で、その方が  
一般的な本文でもあり、左歌への評語ともよりよく調和すると思う。  
【考察】三十番の二首も、述懐の歌である。

二首ともに『山家集』『西行上人集』の雑の部に見える。『山家集』では、左歌(七九六)は次の詞書で出ている。

故郷懐と云ふ事を、ときはの家にて為業よみけるに、まかりあひて

また右歌(一一二二)は初句「しをりせじ」の形で、次の詞書を添えて出ている。

おもはずなる事、おもひたつよしきこえける人のもとへ、高野よりいひつかはしける

『西行上人集』では、左歌(五〇七)は、「為業朝臣ときはにて、古郷懐といふことをよみ侍りしに、まかりあひて」の詞書で出ている。右歌(五四〇)は、「述懐の心を」と題する歌群の中の一首として出ている。二首はまた『新古今集』にも収められているが、左歌(一六七八)も右歌(一六四三)も共に「題しらず」となっている。

左の歌は、前記の『山家集』等の詞書により、具体的な詠作の事情が知られる。詞書に見える「ときは」は洛西の常磐で、藤原為忠の屋敷があり、それを伝領した子の為業(出家して寂念、大原三寂の一人)がそこで「故郷懐」を題として歌を詠んだ際の西行の作である。一首は、草の茂る廃園を昔の庭の記憶を頼りに幾つかの草むらに区切って見、ここは何の跡、あそこは何の跡と、あらためて昔の様子を思い浮かべよう、との大意であろう。懐旧の情を強く出した作である。ただ「いく一むらに」はあまり類を見ない言い方である。あるいは本歌の「一むら」の語をそのまま用いることで本歌を印象づけようとしたものかもしれないが、西行らしい自由な表現のように思う。

右の歌は、前記の『山家集』の詞書によれば、「おもはずなる事、おもひたつよしきこえける人のもとへ」高野から詠んで送った歌というのであるが、「思はずなる事」、意外な事とはどんな事であったのか、それを「思ひたつよしきこえける人」はどんな人であったのか、推測した説はあるが決めることはできない。そういう具体的な詠作事情は不明とする外はないが、「憂き事」と思われることを聞かされて、そ

んな事の耳に入らないように一層山深く分け入ろうとの一首の趣意は明白である。内容に似たところの認められる古歌に、

いかならんいはほの中に住まばかは世のうきことのきこえござらむ(『古今集』九五二、よみ人しらず)

があるが、西行の歌は「しをりせで」、枝折りをせず山深く分け入ろうと言うので、強い意志を表した点に特徴があると思う。

俊成の判詞で、「右、又をかし」という本文によれば、右歌を「をかし」と評していることになるが、右歌のどんな点が「をかし」と言えるのであろうか。「しをりせで」と山深く分け入る意志を強調した発想を、珍しいと見、興味あるものと見たのであろうか。しかし、ここは「右、いとふ心又ふかし」という本文が一般的であり、その方が「左、心ことにふかし」とよりよく対応するようである。そして左右ともに「心ふかし」と評したとすると、「持とすべし」という判定も納得されやすいと思う。

【備考】三十番左右の歌は、ともに『新古今集』(一六七八、一六四三)に収められている。

### 三十一番 左勝

六一晝のあらしにたぐふ鐘のおとを心のそこにこたへてぞ聞く

右

六一よもすがら鳥のね思ふ袖のうへに雪はつもらで雨しをれけり(大成)

右歌、末句などいとをかし。但、左歌、殊に甘心す。よりて勝とす。

### 【通釈】

### 三十一番 左勝

六一晝の、あらしの音とともに響く鐘の音を、心の奥底に受けとめて聞く。

右

六二夜通し、雪山の寒苦鳥の鳴いたことを思っていると、袖の上に雪

は積もらないが、涙の雨が落ちて袖がぬれた。

右の歌は、下の句などが大層面白い。しかし、左の歌は、特に感服する。そこで（左の）勝とする。

【注】○暁のあらしにたぐふ鐘の音 暁の強い風の音と共に響いてくる、寺の鐘の音。「たぐふ」は、連れだつ意。○心のそこにこたへて心の奥底に深く感じとめて。○鳥のね思ふ 『聞書集』の一首の詞書に「雪山之寒苦鳥を」とあり、その鳴くことについての言い伝えを思ふ意。「雪山」はヒマラヤ山脈の古名で、「寒苦鳥」はそこに住むという想像上の鳥。寒苦鳥に関する『岩波仏教辞典』の解説を摘記すると、「夜は穴居して寒さに苦しみ、明日は巢を造ろうと鳴き通すが、朝日を浴びると寒苦を忘れ、今日明日の命も保証しがたい無常な世の中に巢造りなどしても意味がないと鳴き通して、毎日を送るという。現世の苦界にあえぎながら、出離解脱の道、すなわち仏法を求めない凡夫の懈怠のたとえとする」。○雨しをれける 涙の雨が降って袖がぬれた、の意であろう。○末句 下の句。この歌合ではこれまでに十九番・二十一番・二十五番の判詞に用いられていた。十九番の「注」参照。○甘心す 感服する。

【考察】三十一番の二首も、述懐の歌であるが、仏者の心境が見られる点に特徴がある。

二首のうち左の歌は、『山家集』雑の部（九三八）で「題しらず」の歌群に、また『西行上人集』雑の部（五四一）で「述懐の心を」と題する歌群に見える。『千載集』雑の部（一一四九）では「題不知」である。右の歌は、『聞書集』（四五）に「雪山之寒苦鳥を」として、第五句「雨しをれけり」の形で見える。

左の歌は、暁の鐘（晨朝の鐘）の音を聞いての思いを詠んでいる。一般に宵暁の鐘の音に対する西行の気持ちは、

たのもしな宵暁の鐘のおともの思ふつきざらめやは（山家集）七一）

の歌の示すように煩惱の罪を消す助けとして頼もしさを感じていたと

思われる。ただ、この左歌の場合は静かな暁の鐘の音とは違い、暁のあらしの音とともに響く、いわば自然と一体化して強く呼びかける鐘の声であるが、それを「心の底にこたへてぞ聞く」、心の奥底に感じとめて聞くという。これはより具体的に言えば、鐘の音の告げる無常の相を、そのまま心に深く受けとめることであろう。その鐘の呼びかけを全くと受けとめる様子が端的に伝えられた一首であると思う。

右の歌は、「雪山の寒苦鳥を」思つての作である。雪山に住む寒苦鳥が終夜寒苦に悩みながら、夜が明けると巢造りを怠ると言われる。その鳥の姿に、苦界に生きながら仏道修行を怠りがちな人間ないし自己の姿を重ね、悔い悲しむ心を詠んだ作と思われる。「雪はつもらで雨しをれける」は、表現技巧として「雪」に対して「雨」を置き、雪は袖に積もらないが涙の雨が袖をぬらしたとの意であろう。

俊成の判詞は、右歌の「雪はつもらで雨しをれける」と詠んだ趣向を「いとをかし」と評する一方、左歌を「殊に甘心す」と評して勝と判定している。左歌が別に趣向を用いず、鐘の音に聞き入る思いを端的に伝えている点を、より高く評価したのであると思う。

【備考】三十一番左歌は『千載集』（一一四九）に収められている。

### 三十二番 左持

六三花さきし鶴の林のそのかみをよしのの山の雲にみるかな

右

六四風かをる花のはやしに春かれてつとめや雪の山道

左、鶴林を吉野のおくに察し、右、春花の風前に雪山をおもへる（大成） 春風花の前に雪山をおもへば、心空無勝負すかた、無勝負。可レ為レ持。

### 【通釈】

### 三十二番 左持

六三（釈尊入滅の時）花の咲いた鶴の林——白い娑羅の林の昔の様子を、今、吉野の山の花の白雲に見る思いがする。

右



六四 風も香る、桜の花の林に春が暮れて、花の雪が山道に積ものを  
見ると、雪山で（積尊が前世）修行を積まれた様子がしのばれる。

左の歌は、（積尊入滅の時）白い鶴の色になった娑羅の林の様子  
を、吉野の奥（の花の白雲）に思い浮かべており、右の歌は、春  
風の花が（雪のように）散り積ものを眺めて、雪山の（積尊の  
前世の修行の）様子を思いやっている、こういう歌の姿は、（大成）  
優劣  
がつけられない。持とすべきものと思う。

【注】○鶴の林 「鶴林」の訓読語。釈迦がクシナガラで入滅した  
時、その周囲にあつて白色にまじり白鶴が群がるように見えたとい  
娑羅の林。ここで「花さきし鶴の林」と言うのは、釈迦入滅の前に娑  
羅双樹が急に花を生じたとも言われる（『大般涅槃経』）との関係があ  
るか。○よしの山の雲 ここでは、吉野山で桜の花が白く咲き連な  
るのを遠望した場合の状態を、雲に見立てた表現であろう。○風かを  
る 和歌では、花などの香りを含んで風がさわやかに吹くことを言  
う。八代集には用例が見られないようであるが、平安末期以後はかなり  
多く用いられた。西行のこの用例は、時期的に早いものに属する。○  
春かれて 春が暮れて。伊藤嘉夫氏編『西行全集』第一巻等では「春  
くれば」とするが、『平安朝歌合大成』に引く諸本にはその形のもの  
はなく、また歌意も通じにくいと思う。○つもるつとめや雪の山道  
花が雪のように山道に積もることから、釈迦が前世に雪山で修行の功  
を積んだことを思いやったという内容を、二つのことをないまぜて表  
現したものであろう。雪山は、ヒマラヤ山脈の古名で、釈迦がその前  
世に雪山童子としてここで修行したと言われる。

【考察】三十二番の二首も、述懐の歌であるが、釈迦歌の性質が濃  
い。共に花のある風景から、鶴林や雪山など釈迦に関する世界を思  
い、それが内容になっている。この点は、一番二番の歌が花・月の歌  
である一方で神の世界を思う内容であったのと似たところがある。  
二首はいずれもこれ以前の歌集には見えない。西行晩年の作かと思  
われる。

左の歌は、吉野山の花の白雲の風景の中に、釈迦入滅の時に白い鶴  
の色に変わったという娑羅の林の様子を思い浮かべている。一方右の  
歌は、花の雪が山道に積もる風景の中に、釈迦が前世に修行を積んだ  
という雪山の様子をしのんでいる。二首とも花のある風景に仏教的世  
界を思う心を、白の色調を主とする静かで穏やかな歌の姿で詠んだ作  
である。

俊成の判詞は、そういう二首の特徴を的確にとらえた上で、勝劣な  
しと判定しているように思われる。

### 三十三番 左持

六五 わしの山思ひやるこそとほけれど心にすむぞ有明の月

右

六六 あらはさぬわが心をぞうらむべき月やはうときをば捨の山

二首の釈教の心、左は靈鷲山を思ひ、右はをば捨山をおもへり。

天竺和国雖異、所詮心月輪を觀ぜり。歌のしなも又同じ。仍為  
持。

### 【通釈】

三十三番 左持

六五 靈鷲山は、思いやると本當に遠いけれど、人の心には本来、澄ん

だ有明の月（仏の心）が宿るのだ。

右

六六 澄んだ月の明るさを現さない、自らの心を悲しむべきだ。月は姨

捨山を明るく照らすのだ。

二首共に仏教に関する心を詠んでいるが、左の歌は靈鷲山のこと  
を思い、右の歌は姨捨山のことを思って詠んでいる。（靈鷲山の  
ある）天竺と（姨捨山のある）日本の国という違いはあるが、要  
するにいずれも人の心に本来備わる真如の月（悟りの心）をとら  
えている。歌柄もまた同様である。そこで持とする。

### 【注】○わしの山

靈鷲山。インドのビハール州、昔のマガダ国の首

府の王舎城の東北にある山。釈迦の説法の地として知られる。○心にすむぞ有明の月 「すむぞ」は「すむを」「すむは」となっている本もある。心に澄む有明の月は、人が本来もつ澄んだ心（仏心、仏性）の象徴として月をとらえる仏教の見方によったもの。○あらはさぬわが心 澄んだ月の明るさ（仏心、仏性）を現し得ずにいる自分の心。○月やはうときをば捨の山 「月やはうとき」の「やは」は反語の意を示し、「うとし」は、関係が薄い意味。「をば捨の山」は、姨捨山で、信濃の国の歌枕。今の長野県更埴市付近の冠着山のことと言われる。この山を詠んだ古歌として、『古今集』の「わが心なぐさめかねつ更級やをばすて山にてる月を見て」（八七八、よみ人しらず）が知られる。『大和物語』では、男が妻にそそのかされて老いた伯母を山の峰に捨てて帰ったが、山の上から月の大層明るく出たのをながめ、悲しみに堪えず、この歌を詠んで伯母を連れてもどったという話（百五十六段）を収めている。山田昭全氏はこの話によって西行の歌の下句を考え、「かの姨捨山の月は姥を捨てた男に懺悔の心を悟らしめたではないか」（『西行の和歌と仏教』）という風に解釈された。ただ、西行がこれ以外に月と姨捨山を詠んだ歌に、「勸持品」と題する「あまぐものはるるみそらの月影にうらみなぐさむをばすての山」（『山家集』八八六、『西行上人集』三八八）がある。これは『法華経』勸持品に、釈迦の姨母が授記（仏が修行者に未来の成仏を予言し保証すること）を得なかったことを憂える風があったのを釈迦が察し、憂える必要のないことを教えた話に基づいた歌で、「月影」は釈迦の教えを示し、「をばすての山」に釈迦の姨母を掛け、その姨母の憂いが晴れたことを詠んだと見られる。この歌などを考慮に入れると、右歌の下句は『大和物語』の男のこただけに特定しない方がよいのではないか。「真如の月は姨捨山を明るく照らす」と広く解しておきたい。なお「考察」で触れる。○釈教 釈迦の教え。仏教。○心月輪を観ぜり 人の内面に備わる真如の月（悟りの月）をとらえている。人は本来、満月に象徴される悟りの心（仏心、仏性）をもっているが、それが一

般に無知のために気付かれないと見る仏教思想に基づいて言われている。密教では観法の一つに月輪観があり、これは心を寂靜にして、本心は清浄完全な満月に等しいと観ずる法である。「心月輪」も、そういう見方に立って言われる言葉で、清浄円満な心の月を意味する。【考察】三十三番の二首も、述懐の歌であるが、釈教歌とも言える。そして三十二番の二首が花を詠み入れていたのに対して、ここでは月を詠み入れている。ただしこの月は、仏教の悟りの心の象徴としての意味をもつ。

二首のうち左の歌は、これ以前の歌集に見えない。右の歌は、『西行上人集』（五四二）で「述懐の心を」と題する歌群の中に見える。後の『新勸撰集』（二〇八四）では「題しらず」となっている。左の歌は、これと似た歌が『山家集』や『西行上人集』にある。『山家集』には『法華経』寿量品の中の句を題として、

一心欲見仏の文を人人よみけるに

わしの山誰かは月を見ざるべき心にかかる雲しはれなば（八九一）

の歌が見える。『西行上人集』には「寿量品」と題して、

鷲の山くもる心のなかりせば誰も見るべき有明の月（六一三）

の歌が見える。二首の内容はほぼ同様で、「靈鷲山に澄む月（仏）」は、人の心にかかる迷いの雲さえ晴れたら、だれでも見ることができるといふ大意であろう。そして二首とも「鷲の山」で始まるが、特に後の歌は「有明の月」と結び点まで左歌に似ているので、伊藤嘉夫氏はこれを「修正して自歌合に採った」（日本古典全書『山家集』）のが左歌とされた。

ただ、左の歌はこれらの二首の歌と似てはいるが、内容上重点の置かれるところが異なっている。すなわち左歌は、靈鷲山は遠いけれども人の心には澄んだ月が宿ると詠み、「一切衆生悉有仏性」（『涅槃経』）の思想によって、自己の内面に本来仏性、仏心が備わっていることに重点を置いている。

右の歌も、左歌と同様、本来自己の内にある仏性、仏心を重んじる思想がうかがわれる。上句「あらはさぬわが心をぞうらむべき」は、悟りの月の明るさ（仏心）を現し得ないでいる自分の心を悲しむべきだ、の意であろう。

右歌の下句「月やはうときをば捨山」は内容が明確でないようにも見えるが、まず月と姨捨山を詠んだ有名な『古今集』の古歌、  
わが心なくさめかねつ更級やをばすて山にてる月を見て（八七  
八、よみ人しらず）

は西行の心にあつたと見てよいであろう。また『大和物語』のこの歌をめぐる話（百五十六段）も、西行の心にあつた可能性はある。一方、西行が右歌以外に月と姨捨山を詠んだ歌を参照すると、『山家集』（八八六）と『西行上人集』（二三八八）に収める「勸持品」と題する次の歌がある。

あまぐものはるるみそらの月影にうらみなぐさむをばすての山  
これは月の名所としての姨捨山を詠み入れているが、『法華経』勸持品に見える、釈迦の教えによって釈迦の姨母の愛いが晴れた話を詠んだもので、「月影」は仏の教えを示していると考えられる。なお、『山家集』（一一〇七）と『西行上人集』（四六五）には、大和の大峰山中で「をばすての峰」「をばが峰」の月を見て詠んだ旨の詞書の下に次の歌がある。

をばすてはしなのならねどいづくにも月すむみねの名にこそ有り  
けれ

これは信濃の姨捨山に限らず「をばすて」の名をもつ峰は「月澄む峰」だと詠んでいるが、この「をばすての峰」が修験道の霊地である大峰山の中にあるだけに、そこに明るく澄む月は西行に宗教的な意味をもつてとらえられてもいるかと思う。

以上のことから考えると、右歌の下句の「月やはうときをば捨の山」は、「真如の月は姨捨山を（人の晴れやらぬ思いにかかわりなく）明るく照らすのだ」といった認識を示しているように思われる。右歌

の上句「あらはさぬわが心をぞうらむべき」は、そういう見方から、その悟りの月の明るさを現し得ない自らの心を悲しむべきだと詠んでいるのであろう。

俊成の判詞に「所詮心月輪を観ぜり」と言うのは、二首に共通する内容上の特徴をよくとらえた評であろう。

【備考】三十三番右歌は『新勸撰集』（一一〇八四）に収められている。

#### 三十四番 左持

六七わか葉さすひらのの松はさらに又枝にや千世の数をそふらん

右

六八沢べよりすだちはじむるつるの子は松の枝にやうつりそむらん

左歌は、ひらのの松に若葉をささしめたり。定て其故ありけむかし。右歌は、たださはべのつるの子の松にうつり初めたるは、祝の心左には及びがたくやとは覚え侍れど、歌の程は猶持なるべし。

#### 【通釈】

#### 三十四番 左持

六七若葉のもえ出た平野の（社の）松は、一層その枝に、限りなく久しく茂る葉を加えることであらう。

右

六八沢べの巢から、巢立ち始めた鶴の子は、（その千年のよわいに似合う）常磐の松の枝に移り初めているのであろう。

左の歌は、平野の（社の）松に若葉がもえ出ることを詠んでいる。おそらくそう詠むべき理由があつたのであろうと思う。右の歌は、ただ沢べの鶴の子が松に移り初めたというので、これは祝の心が左の歌に及ばないのではないか、という気はするのですが、歌の程度としては、やはり持が適当であらうと思う。

【注】○わか葉さす 若葉がもえ出る。○ひらのの松 「ひらの」は、今の京都市北区にある平野神社。『枕草子』の「神は」の段にも

挙げられている。円融天皇の時、初めて平野祭に勅使が立てられた際に、大中臣能宣の詠んだ歌「ちはやぶる平野の松の枝しげみ千世も八千世も色はかはらじ」(『拾遺集』二六四)が知られていたようで、西行の左歌もこれを本歌とする。○枝にや千世の『新編国歌大観』所収本文はこの表記であるが、「枝に八千世(八千代)の」と解するのがよいかもしれない。いずれにしても上記本歌の語を用いたもの。○すだちはじむるつるの子 育った巢から飛び立ち始める鶴の子。「鶴寿千歳」(『淮南子』)の語の示すように、鶴は千年の寿命を保つと言われたので、「鶴の子」の語は将来の長寿を祝う気持ちを託して用いられる。

【考察】三十四番は、左右ともに祝の歌である。

二首はいずれも『山家集』(一一八一、一一七四)にあり、雑の部で「いはひ」と題する歌群の中に見える。なお左の歌は『西行上人集』(五二五)にも「祝を」と題する三首の中に見える、『山家心中集』(二八〇)でも「いはひの歌よみはべりし中」として見える。

左の歌は、「注」に触れたように、本歌として大中臣能宣の次の歌が考えられる。

ちはやぶる平野の松の枝しげみ千世もやちよも色はかはらじ(『拾遺集』二六四)

この本歌と同様、平野神社の常磐の松の様子に託して、君の代の永続と繁栄を祝ったものである。本歌に比べて新しさの見えるのは、若葉のもえ出たことを加えた程度であるが、こういう祝の歌は、本歌との隔りをこの程度にとどめるのがよい場合もあるのかもしれない。

右の歌は、千年の寿命を保つとされる鶴の子が巣立って松の枝に移り初めていると詠む。鶴と共に松の寿命も千年と考えられていたことは、例えば次の歌が示している。

つるのすむ松がさ木にはならべたる千世のためしを見するなりけり(『拾遺集』六一七)

それでこの右歌も、鶴の子と松を並べ、それに託して長寿と繁栄を祝

ったものであろう。

左右ともに祝の歌として似た歌柄で、個性的な特長は乏しいようであるが、特長はむしろ声調ののびやかさに求めるべきであろうか。俊成の判詞も「歌の程」は持としている。

### 三十五番

左

六九くもりなき鏡のうへにゐる塵をめにたてて見る世とおもはばや

右勝

七〇たのもしな君きみにます折にあひて心の色を筆に染めつる

左右共に由緒ありけむとは見えながら、左は諫訴の心あり。右は聖朝にあへるに似たり。仍以右為勝べし。

【通釈】

三十五番 左

六九曇りなく澄んだ鏡の上にある(わずかな)塵も、目を留めて見る、そういう世と思いたい。

右勝

七〇頼もしいことです、——わが君が、天下に君としていらっしゃる時世にあつて、心の様子を記すことができました。

左右の歌は共に何か根拠になる事柄があつたのであろうと推察されるが、左の歌はいさめ訴える心が含まれている。右の歌は聖天子のみ代にあつた(喜びの)心が詠まれているように思われる。それで右の歌を勝と判定しようと思う。

【注】○くもりなき 『山家集』陽明文庫本では「くもりなう」。その場合は後の「めにたてて見る」にかかることになる。○めにたてて見る 注目する。○君きみにます折 わが君が天下に君臨される時世。この君は『新勅撰集』(一一五四)の詞書(後に引く)によれば高倉天皇。

【考察】三十五番の二首は、述懐の歌と見られる。(『平安朝歌合大成』では共に祝の歌とされる。そう見得るなら歌合の構成が一層整う

かと思うが、左の歌は祝の歌であろうか。

二首のうち左の歌は、『山家集』雑の部(七一七)に見え、題詞等はない。右の歌は、『西行上人集』雑の部(五四三)で「述懐の心を」と題する歌群の中に収められている。また右の歌は『新勅撰集』(一一五四)では、次の詞書と歌の後に見える。

高倉院御時、つたへそうせさすること侍りけるに、かきそへて侍りける  
西行法師

あととめてふるきをしたふ世ならなむいまもありへばむかしなるべし

左の歌は、詠作事情を伝える資料がなく、具体的な内容がとらえにくい点があるが、現代では一般に次のような解釈が多いと思う。

悟りを開いた心の上のわずかな煩惱の塵をも問題にする世の中だと思おう。

これは日本古典文学大系『山家集』頭注に記される「大意」である。同書にはこれ以上の説明はないが、高木きよ子氏『西行の宗教的世界』では、これと同様の大意を挙げた上で「つまり人の言うことはそれなりに受けとめようという心構えを示している」とされる。また後藤重郎氏校注『山家集』(底本は陽明文庫本)では、現代語訳として、

曇りない心境で、鏡の上にある塵を目ざとく見つけるごとく、明鏡止水の心にきざす僅かな煩惱をも問題とするこの世と思ひ心を戒めたいものだ。

と記し、「めにたてて見る」に関して「諸注は世間が「塵」を非難する意とするが、自戒の意と解したい」とされる。これは煩惱を世間が実際に非難するか否かにかかわらず、煩惱を問題にする世と思ひ自戒したいとの意と思う点を強調されたものであろう。

一方これらの解釈とは大きく異なると思われる解釈ないし理解もある。俊成は左歌の判詞に「諫訴の心」があると言っているが、「諫訴の心」は以上の解釈には認めがたいので、俊成はそれとは異なる理解をしていたと思われる。山本幸一氏『西行の世界』には、その俊成の

判詞を参照した解釈が見られるので、次にその要所を引いてみる。

かすかな塵をさえ、ことさらに非議するような「世」に対し、「世と思はばや」と内心に噛みしめているような感じの表現だ。

そこに「陳訴」の心を見たのは俊成だった。御裳濯川歌合で、高倉院敬仰の歌とつがえられているのを見ると、何か秘事があるのかもされない。とにかく、低次元の社会相への、ある憤りがじつと抑えられているような歌となっている。「くもりなき鏡」とは、自身を擬したともとれるが、あるいは高貴な君主をたとえたものかもしれない。君主の徳をたとえたと見る方がふさわしいように思える。

この解釈には、「くもりなき鏡」を「君主の徳」に関連させた見方が示されている。これによれば、一首に俊成の言う「諫訴の心」(引用文では「陳訴の心」)を認めることが可能になりそうである。また君主への思いを述べた点で右歌と対応し、左右の歌が番えられた意味もより明らかになるように思われる。ただ俊成の理解も絶対に正しいとは言えないし、詠作事情が分からないと、この解釈が作意に近いと決めかねるところがあると思う。

右の歌は、素直な表現で、詠作事情を伝える資料がなくてもほぼ理解されるが、『新勅撰集』(一一五四)で先に引いた詞書と歌に続いて出ているのによれば、一首の具体的な内容がある程度推測することが可能になる。それによると、高倉天皇に西行が人を経て奏上することがあった際に書き添えたのが、前に置かれた歌(一一五三)で、その歌の内容から「勅撰集の御事あれかしと奏上した」(川田順氏『西行の伝と歌』)かと思われ、一首もそういうことに関して、思いを書いて天皇に奏上し得たのを喜んだ歌かと推測される。

俊成の判詞は、左の歌に「諫訴の心」があるのに対し、右の歌は「聖朝にあへる」喜びの心をもつと見て勝とする。右の歌の方がおおらかに詠まれているのは事実であろう。

【備考】三十五番右歌は『新勅撰集』(一一五四)に収められている。

三十六番 左持

七二深く入りて神路のおくをたづぬれば又うへもなき峰の松かぜ

右

七二流たえぬ波にや世をば治むらん神かぜすずしみもすその岸川(大成)

左歌、心詞ふかくして愚感難難し抑(大成)押。但右歌も、神風久しくみもすその岸にすずしからむ事、勝劣の詞を加へがたし。仍持と申すべし。

【通釈】

三十六番 左持

七二深く分け入って神路山の奥をたづねてゆくと、この上もない峰(靈鷲山)の松風が、ここにも吹いていた。

右

七二流れてやまぬ御裳濯川の波そのままに、永く神の威徳によって世を治めておられるのであろう、——御裳濯川の岸べに神風がすがすがしい。

左の歌は、その心、言葉に深さが感じられて、抑えがたい感動を覚えるのです。ただし右の歌も、神風が永く御裳濯川の岸にすがすがしく吹くことを詠んでいて、優劣を決める言葉を加えにく。そのため持と申しましよう。

【注】○神路のおくをたづぬれば 「神路」は神路山で、伊勢神宮内宮の神苑の山、内宮の南方に当たる。その「おくをたづぬ」と言うのは、伊勢神宮の奥義を窮めるのを暗示することが、『西行上人集』や『千載集』の詞書から察せられる。○うへもなき峰 この上もない峰。ここでは仏教の聖地である靈鷲山(釈迦説法の地。三十三番「注」参照)を示すことが、『西行上人集』や『千載集』の詞書から察せられる。○流たえぬ波 ここでは、流れてやまぬ御裳濯川の波を意味し、それを通じて天照大神の威徳の永遠であること、さらに言えばその神の子孫としての皇統の永く続くことなどを暗示しているのである。

う。○神風 神の威徳によって吹く風。○みもすそ 御裳濯川。伊勢神宮内宮の神域を流れる五十鈴川の別名。

【考察】三十六番の二首は、神祇歌である。左は神路山、右は御裳濯川を詠み入れており、ともに伊勢神宮内宮の神の威徳をたたえる歌である。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』(六二六)に、次の詞書で見える。

高野山をすみうかれてのち、伊勢国二見浦の山寺に侍りけるに、大神宮の御山をば神千山と申す、大日の垂跡をおもひてよみ侍りける

『千載集』神祇歌の部(一二七八)にも同様の詞書で見える。一方、右の歌は、『西行上人集』(三七九)に「伊勢にて」として出ている。

左右ともに伊勢神宮内宮の神の威徳をたたえた歌であるが、左右を比較すると、左の歌は前記詞書に見るとおり本地垂迹思想に基づき、内宮の祭神天照大神の本地を大日如来と見ており、神の世界の奥に仏の世界をとらえた点に特色があると言えるであろう。そして西行が伊勢に移住する前の約三十年にわたって生活の本拠を置いた高野山は、大日如来を中心仏とする真言密教の道場であるから、一首は思い付きの作とは見がたく、宗教者としての西行の感じたままを歌っているかと思われる。「深く入りて」という字余りの句で始まる歌の調べも、莊重であるが滞らず、西行の思いをおのずと響かせているように思う。

これに対して右の歌は、天照大神の威徳によって治世が永続することを詠んでいる。ここには大神の子孫の皇統の治世が続くことへの祝意も含まれているであろう。この場合治世の現実が顧みられていないと思うが、御裳濯川の清流に「神風すずし」と感じる西行の神への賛歌の面に重点を置いて見るべき作であろう。「流れたえぬ」という字余りの句で始まる悠々とした調べも歌の心に合っているようで、こういう点は左歌の場合と同様である。

このように、神の威徳をたたえる上で、左の歌には仏の世界を重ね合わせる心が、右の歌には治世とのつながりを思う心がかがわれるが、要は二首ともに伊勢神宮の神への西行の敬虔な賛歌として詠まれている点であろう。そのために二首はこの歌合の結びの三十六番に置かれ、花月の歌ながら同様の性質をもつ一番二番の歌と首尾相応じて、伊勢神宮に奉納する歌合にふさわしい体裁を整えていると思われる。

俊成の判詞は、特に左歌の心詞に深いものを感じて感動しているようであるが、右歌にも神への賛歌としての特長を認め、持と判定している。ただ、俊成は『千載集』に左歌を入れて右歌を入れていないから、撰歌の際に二首を見ていたとすると、やはり左歌の方より心ひかれるところがあったと思われる。

【備考】三十六番左歌は『千載集』(二二七八)に収められている。